

〈対談〉

「覇権」問題をどう考えるか

慎重要する日本の外交的選択

〈出席者〉

中嶋嶺雄

(東京外国語大学助教授)

和田春生

(参議院議員)

中ソ対立の性格が変わった ●

和田 いま日本をめぐる国際環境の中でいろいろな問題が起きてきているわけですが、特に直接の問題としては日中平和友好条約の締結交渉があり、しかもその最大のネックになっているのが例の「覇権」問題ですが、これは単に日中関係の問題だけではなく、中ソ関係、日ソ関係、また日本と韓国、北朝鮮の関係等にもいろいろな関わりを持っていると思います。さらにポスト・ベトナムという

ような形で、中には次は朝鮮半島だというような気の早い議論もあるようです。

そこで中嶋先生は最近ソ連の方からずっとモンゴルを回って、しかも中国の方にも行かれてきたという、大変興味深いコースを通じて、じかに現地のことと触れてきておられるのですが、まず現地でお感じになった印象からお伺いしたいと思います。

中嶋 実はこの冬に、中ソ対立が始まってから専門の研究者では初めてだということでしたけれども、私は国境地帯を通過してユーラシア大陸を縦貫する「社会主義」三カ国を訪れました。それから先週(六月初旬)は東南アジアから朝鮮半島もちょっと行ってきまして、板門店にも参りましたが、いわばアジアの激動する状況の中をかけずり回ったようなことになるわけです。

そこで一口に私の印象を申し上げますと、

中ソ対立の現段階の性格が二三年前よりもずいぶん変わったのではないかと印象な

んですね。ご承知のように二三年前は口を開けば、「戦争に備えよ」ということを中国はしきりに強調していました。そして「ソ連が攻めてくる。それに対して戦争に備えなければいけない」というので臨戦体制を非常に強化していました。そういうスローガンも目立ったのですけれども、最近どうもそのようなことは言わなくなったですね。

ことし一月の全国人民代表大会の基調報告その他も、十全大会のころとはずいぶん違って、ソ連の脅威を直接的に語るといってではなくて、むしろソ連の狙いはもつと根が深くて深謀遠慮なのである。つまり、二三年前はソ連の侵攻に対して備えよといっていたのが、今度はそれにかわって、よく言われるように「東に声をあげて西を撃つ」という



左から中嶋、和田の両氏

スローガンを出してきている。この場合の「西」はもちろんヨーロッパという意味もあるけれども、いわゆる自由陣営というか社会主義圏以外の地域においてソ連がいろいろなことをやろうとしているのだということを中国がしきりに強調するわけです。言ってみれば、中国封じ込め政策と中国が考えているものに対して、単に共産圏の中だけではなくともっとグローバルな次元で戦略的な対決をしようという姿勢だと思ふのです。

それは私がしきに旅行ができたということですね。これにはいろいろの困難があつて、ある意味では幾つかの偶然が重なつたり、あ

るいはいろいろの努力が実つたわけですけれども、もしも国境を隔ててまだ非常に軍事緊張が続いているとすれば、恐らく私はそこを通過できなかつただろうと思います。

しかも私が見てきた印象でも、モンゴルがソ連の恒常的な軍事基地であることは言うまでもないのですが、しかしながらそれはもうあたりまえのことになっていて、特に中国側に入りますとそういう緊張を感じさせる雰囲気はほとんどありませんでした。たとえは生産建設兵団とか、紅衛兵の下放運動というようなものは辺境に展開されているということが言われましたね。それについてもいろいろ調べもし、先方にも聞き、この目でもできる限り見ようとしたのですが、そういう雰囲気は全くない、非常にのんびりしてしまつて、ある意味ではあの国境地帯に中ソ双方がそれぞれ一〇〇万近い兵力を集結しているということがうそのような印象を受けたのです。

私はもちろん、ある日長大な国境の一線を通つただけですから、それですべてとは言えません、そのようなことを私の調査なりあるいは中国の最近の文献その他に照らしみますと、どうも中ソ対立の現段階の性格は変わったのではないかと。ということは、中ソ対立が、あの国境を挟んで双方が軍事的に対決しているということであれば、まだ日本を取り巻く国際環境においては割合に事は単純な

んですけれども、もっと複雑に、中ソ対立がよりグローバルな国際戦略の対立になつた。それは特にアジアにおいて非常にそういう問題が出てきている。そのことが実は、中国側として「覇権」問題にこれほどこだわらざるを得ない原因ではないかという気がしますね。

もう一つは、「覇権」問題は、中国の方は明らかにブレジネフ・ドクトリンを指しているわけですし、私がこの間朝日新聞にちよつと書きまして、それ以来「覇権」という言葉が日本語だということ、「天声人語」も取り上げていましたけれども、これは私、辞書などをいろいろ調べたりしたのですが、日本の言葉に向うが受け入れて出している「自力更生」という言葉と同じような言葉なんです、中国がこの時期に「覇権」問題にこだわるのは、中国としては七〇年代に入つてからのソ連のブレジネフ・ドクトリン、つまりアジア集団安保体制というようなものを非常に意識しています。したがって、それを逆に各個撃破したい、あわよくばこの「覇権」問題を入れたところの、いわば中国との同盟を各国に広げていきたい、というのでしょうか。

ご承知のように「覇権」という言葉に対して、ソ連の方はいわゆる協議条項、コンサルティング・アイテムと称して、ソ印条約などに「一旦緩急あらば両締約国が協議する」ということを入れていますね。そのことは印パ

戦争で実際に効力を発揮したのですけれども、そういう形でイラン、イラク、インド、パングラディシユ、アフガニスタン等々との間に進めているソ連の平和友好条約は、まさに協議条項を含んでいる。実は過般の日ソ交渉でも、ソ連はこの問題を日本に打診しているはずです。こういう問題があるだけに、今度は「覇権」問題をめぐって一種の踏絵をつきつけるということになって、日中平和友好条約がこういう状況になってきたということが言



中嶋 嶺 雄 氏

えると思うのですね。そうすると、「覇権」問題は単に日中間のバイラテラルなイシューではなくて、やはり非常にグローバルな、アジアの将来にとっても大きな意味を持つ問題提起であるということが言えるような気がしますね。

もう一つつけ加えますと、中国が初めて「覇権」という言葉を使ったときにも、ブレジネフ・ドクトリンはまぎれもない覇権主義だということを言っているのですが、中国側

はどうもこの「覇権」という言葉を三つの段階において使っている。一つは、毛沢東のスローガンにあるところの「覇を称えず」ですね。すなわち「深く地下道を掘り、広く食糧を貯え、覇を称えず」という毛沢東のスローガンに出てくるのですが、これはある意味で中国の一種の外交原則であり、内政の原則であるが、ある意味での現在の中国の精神的な意思表示なんですね。これに対して、ご承知のように米中コミュニケーションにあったのが「覇権を求めない」という言葉ですね。その次に今度の社会党の訪中団が共同声明にあらわしたのは「覇権主義」という言葉ですね。

つまり、「覇を称えず」、「覇権」、それから「覇権主義」ときたわけですが、これは「覇権主義」が最も強い、いわば戦略的な主張ですから、こういうふうと考えてみますと、成田さんは最も深く中国の戦略にコミットする形で「覇権」問題を向こうと合意してきたということになるわけです。これはある意味で日本社会党の政権能力というようなことからしても非常に問題があるわけですし、また同時に幾ら社会党が弁明しようとも、ともかく表向きは公式に、いわば反ソ同盟を誓い合ったということになるわけですから、その点では社会主義協会の批判も当たらないではないという気がするのですね。

玉虫色の解釈ではダメだ●

和田 いまのお話では、現在の中国の対ソ戦略という面で、単に国境を挟んでの軍事的対決ということよりもっと大きく、グローバルにソ連の世界戦略というものをとらえて中国が反対している、そういう中で「覇権」反対ということがどういふふうに位置づけられようとしているかということですが、米中共同コミュニケーションのときには、「どちらの側もアジア太平洋地域で覇権を求めるときではない、いずれの側もいかなるその他の国の覇権を打ち立てようとするにも反対する」という、表現になっていましたね。それが、社会党と中国との共同声明では、明らかにソ連とアメリカというものを並列に挙げて、しかも具体的な行為を指摘をして、名指して、「両超大国の覇権に反対する」。

中嶋 「覇権主義」と、「主義」ということが入っていますね。

和田 そうでしたね。「両超大国の覇権主義に反対すること」を一致して認めた」ということを言っているわけです。その間にあつて、日中平和友好条約で中国側は非常にこの「覇権」問題に強く固執していますね。これについて三木さんがきのう（六月十一日）国会の質疑の中で、どうも「覇権」問題は横道にそれているのだという言い方をしている。それ

はそういう特定国の「覇権」に反対ということではなくて、一般的な、普遍的な原則としての「覇権」反対ということならいいのだという意味のことを答弁しているわけですが、そうするとどうも中国側が言っていることと、三木内閣がそれを受けとめて答えようとしていることは、非常に大きくすれ違っているような感じなんですね。

中嶋 そうですね。日本政府としては、もし「覇権」問題を入れるならば、要するに玉石色に解釈して、日本としては抽象論として語っているのだというふうに理解したような顔をして、この問題を入れざるを得ない状況にいまなっていますね。しかしながら、ご承知のように中国としては、ブレジネフ・ドクトリンが提起されたのは六九年ですから、それを見据えた上で七〇年代になつてから、この言葉を提起し始めた。それには中国内の非常にどぎついと申しましようか、政治主義的な解釈と定義があるわけですし、それはやはりいかに「覇権」という言葉を日本がそういうふう理解しようとも、この言葉は一般名詞ではなくなっているのです。

これは非常に細かいことになって恐縮ですが、「覇権」という言葉は一般名詞としては中国では使っておりません。しかしながら、毛沢東が四六年にアンナ・ルイズ・ストロングに語った中で一回だけ、「世界覇権」という

言葉を使っているのです。というのは、当時毛沢東はソ連を大変ほめまして、「ソ連がいる限りアメリカの世界覇権の野望は実現しないのだ、だからわれわれはソ連に兄弟しなければいけない」と言ったわけですが、ソ連を社会主義国先進国として毛沢東があつた時大変たたえた言葉の中で言っているのです。そうしますと、毛沢東のしゃべっている言葉、選集なんかに出てくる言葉は全部字引きに入るのですが、「新華字典」の初版本にはその言葉は一般名詞として入っているのです。ところが、一番新しい「新華字典」からは逆にこれは抜けちゃつていっているのですね。なぜいまの新しい「新華字典」にこの言葉が抜けたのか。これは私もいろいろ調べてみたのですが、どうも「覇権」という言葉を一般名詞としては使えなくなつてきている。そうすると特殊な意味づけをしなければならぬ。ですから次に改訂されるまでには、恐らく超大国とかソ連をさす用例を使つて使うのだろうと思うのです。

そういうふう単に一般論としては語り得ない問題なので、三木さんがそういう解釈をしても、これはある意味では、社会党の成田さんが向こうへ行つてきてそういう共同声明を結びながら、これは何もソ連を敵視するのではないという説明をするのと同じような結果になりかねないような気がしますね。

和田 その点は七二年二月の米中共同コミユニケの場合には、中国側が言ったということの中に、「いかなる覇権主義と強権政治にも反対する」という形で入っていますが、五年の一月に出た中国の新憲法の前文の中には、「帝国主義、社会帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対し、超大国の覇権主義に反対しなければならぬ」というふうになつているわけですから、ご指摘のように非常にはっきりしてきたわけですね。

中嶋 そうです。

和田 それで「社会帝国主義」は明らかにソ連をさしている。そういう中で三木さんが、だからいけない、日本としてはのめないのだというのなら一つの立場なんでしょうけれども、「覇権」主義という言葉が、「覇権」問題が横道にそれているから、一般原則としていいというなら、これはもう交渉にならぬということになりませんか。

● 条約の前文にも入れるな

中嶋 そういうことになりますね。ですから、外務省は実はこの間ずいぶんいろいろなことを学びまして、やはり中国との関係というものは、そう一時のブームでわーっとやつたのではだめだという教訓を得たわけですが、非常に高いレクソン代を払つたと思うのですよ。ですから、この問題で外務省自身はある

程度考え方を固めてきていますが、問題は三木さんがどうなるかということなんです。どうもいまのような三木さんの選択は、結局「覇権」問題を日本があえてごまかしたふりをするということであって、問題の解決にはならない。

私はここでは必ずしも政策論をやる必要はないのですが、やるとすれば、前文に入れるのではなくて、外相談話のような形で日中共同声明の精神は認めて、われわれはその問題ではそういう「覇権」反対の精神は共同声明にあるとおりでくらの、そういう選択をすべきだと私は思うのです。本文にはもちろんのこと、前文にもこれは入れるべきではないような気がしますね。

本日は七二年秋の日中国交正常化の時点で、この問題に気づかなければいけなかったですね。ところが、あの時点では、マスコミもそうですけれども、政府もこの問題に全く気づかず、外務省の条約課長の公式な共同声明についての解説がございしますが、そのときにはたった二行で、「これはアメリカも認めたことであるから何ら問題はないところであります」と書いてあるのです。(笑)

ここには、対米追随外交の残滓と、日本がいまのアジアの日中ソという三角関係の中でこの問題を認めることの持つ意味と、アメリカにとっては一番基本的な問題は対ソ関係で

すから、そういう意味ではアメリカというグローバルなパワーが明らかにソ連を意識してこの問題について発言することの持つ意味の違いですね、それは決定的に大きいわけで、この点についての認識がなかったわけですね。そしていまになって、この問題がこんなに大変なことになってきたというわけでして、そういう意味からしても、この問題はより長期的な日本の外交姿勢、特に対中、対ソ外交をどういうふうに位置づけていくかという、そういう長期的な視野の中で考えていくべきではないかというふうに思いますね。

和田 その点で、三木さんの姿勢を見ますと、どうも何かレトリックでうまくやれば済むというような認識のようだし、しかも「覇権」問題は横道にそれているというのではなくて、中国がむしろ強烈にまっ正面から持ち出してきたわけですから、そういうものに社会党が組み込まれて、ソ連から強烈な批判を受けて成田さんは名指してボロクソに言われていますけれども、もし三木さんがそんな形で日本式の玉虫色ということであるようなことを考えてやったとしても、今度はソ連はそういうふうには受け取らずに、中国のそういう対ソ戦略の一環に日本も組み込まれたという評価をするでしょうね。

中嶋 するでしょうね。しかも今度の場合、条約として初めてのケースだということ

★稲葉発言で紛糾(五月三日)

三日の憲法記念日に稲葉法相が自主憲法制定国民会議に出席したことをめぐって国会審議は空転。

三木首相は衆参の本会議で①三木内閣は改憲しない方針で、改憲運動のリーダーシップもとらない②三木内閣の閣僚は改憲推進の会合には出席させない③憲法記念日に内閣の責任で意義ある行事をする、との基本姿勢を表明して收拾した。

★社党代表団が訪中(五月五日)

社会党第六次訪中代表団(団長、成田委員長)は注目されていた「覇権」問題について中国側の要求通り、「二つの超大国の覇権主義に反対する」との文言を共同声明に入れた。これに対しソ連は名指して成田委員長を非難。

★米、韓国防衛を確認(五月六日)

フォード米大統領は「韓国と一層密接なつながりを促進、台湾に対する防衛約束を再確認」と強調。キッシンジャー國務長官も「韓国防衛義務を守り抜く」と述べた。

★英女王来日(五月七日)

英国のエリザベス女王夫妻は国賓として来日。英国元首の来日は初めて。

★春闘ヤマ場越す(五月一〇日)

交通ストで全国で延べ五千七百万人の足を奪った春闘は、公労委が三公社五現業平均一万七千二百七円(一四・一三%)の收拾案を示して仲裁移行を決め収束した。私鉄はベア一万七千円で妥結。

を、われわれは十分理解しなければいけない
と思います。二三日前にフィリピンのマル
コス大統領が北京で国交樹立の共同声明を出
したときに、一部の北京特派員は、アジア諸
国も「覇権」問題をこういう形で認めている
のに、いま日本政府がちゅうちょしている
は何ごとかというような書き方をしています
が、アジア諸国の場合は、たとえばこの例
は共同声明の段階ですから、ある意味で日本
が先例をつくっているわけですね。今度は、
国家間の権利、義務を長期にわたって伴うと
ころの条約において、日本がこの問題を明記
するということはやはり大変なことですし、
一時の一政権、一政府の解釈がどうであらう
と、それは長期的にわたって日本を拘束しま
すね。

ましてやもしも日本がそういう立場を受け
入れてしまうと、今後アジア諸国と中国が条
約を結ぶときに、すべてその問題が引がか
つてくる。そのことよって、現在もアジア
に中ソ対立の影が多いのに、あえて今日のア
ジア諸国を中ソ対立の中に巻き込んでいくと
いうことになりませんから、単に一内閣、一政
権、あるいは内政上の考慮なんかで条約のこ
とを考えることもできないし、やはりアジア
全体の問題にかかわる重要性を持つと思いま
すね。それだけに、これは慎重に考えていく
必要があるのではないのでしょうか。

和田 ソ連の側がそういう中国の動きに對
していまだどういう対応をしようとしておるの
か、またどういう考え方でこの問題について、
日本を初めとしてアジア諸国に對する牽制と
いうかアプローチをしようとしているのか、
そういう点はいかがでしょうか。

中嶋 実はブレジネフ・ドクトリンは、こ
れ自身は抽象的なものですけれども、ソ連の
たとえば「国際生活」誌なんかもそう言っ
ておりますが、アジア集団安保構想の具体的
第一歩は、ソ連との個別的な平和友好条約の
締結であるということを行っているわけ
です。そうすると、ソ連も中国とある意味では同じ
ようなことを、むしろソ連が先鞭をつけて、
インド亜大陸あたりからこうやってきたわけ
ですね。その中に、さっき言ったような協議
条項みたいなものを求めて、実際には平和友
好条約でありながら、あるいは平和条約であ
りながら、純軍事条約的なものを各国との間
に結んでいく、これがアジア集団安保の重要
な一つの布石であるという態度をとっていま
すね。

ソ連は今回の日中平和友好条約に對して、
東京でトロヤノフスキー大使を初め大変な外
交攻勢をやりましたけれども、この問題は、
こういう形で中国の影がアジアに拡大してい
くに従って、いまのソ連の基本的な戦略を放
棄することなく、またソ連は現実主義外交で

★マヤゲス号事件発生(五月二二日)

カンボジアは米貨物船マヤゲス号を捕獲。沖縄、
フィリピンから米海兵隊がタイへ移駐開始。米軍
がマヤゲス号を武力奪回、乗組員も全員救出。タ
イ政府は米の基地使用に抗議。

★韓国、緊急措置を強化(五月一三日)

韓国は国内体制の強化をはかるため、緊急措置第
九号を公布した。これによって憲法批判と反政府
デモの禁止などを強める。

★連続爆破の犯人逮捕(五月一九日)

昨年八月の三菱重工本社爆破など、十一件の連続
爆破事件を捜査していた警視庁は、「東アジア反
日武装戦線」の割り出しに成功。八人を爆発物取
締罰則違反容疑で逮捕、十八カ所を捜索した。

★国会は延長(五月二四日)

七十五通常国会は、七月四日まで四十日間会期を
延長することを衆院本会議で議決した。

★「日米防衛分担」明文化へ(五月二九日)

三木首相は、防衛庁幹部との協議で、「有事の際
の自衛隊と在日米軍との指揮系統を調整するよう
指示した。

★消費者物価また上昇(五月二九日)

総理府は五月の東京都区部消費者物価指数を発表。
四月より一%上昇。前年同月比一四・四%の上昇。
野菜、婦人服、入浴料の値上りがひびく。

★核拡防再検討会議終る(五月三〇日)

ジュネーブで開かれていた核拡防条約再検討会議
は、四週間にわたる討議を集約した最終宣言を全
会一致で採択、閉幕した。

アジア諸国に接近していくのではないかと思
いますね。

そういう意味では、どうもすでに中ソ対立
というものがアジアに広がろうとしているし、
そして現にサイゴン失陥と言いましようか、
サイゴン「解放」ですか、どういうふうと言
うにせよ、ハノイを通じての影響力の拡大も
考えているわけだし、そして特に現在のソ連
は、私は二つの方向を出していると思う。

一つは、外交的に各国と平和条約を結んで
いく。そのことによって各国をソ連に引きつ
けていく。もう一つは、軍事的あるいは海洋
戦略というものを通して、今回のスエズ運河
の再開に見られるように、ソ連のアジアに対
するプレゼンスを拡大していくという方向が
ますます顕著になる。だから下手をすると、
日本の安全保障にとっても——いま海の問題
は、ただでさえ漁船の問題とかいろいろある
わけですが、日本海の安全そのものを考えて
も、下手に日本が対応した場合には、ソ連は
ある意味で非常に日本にとつての脅威になる
という気がするのですね。

● 朝鮮半島と南シナ海を見よ ●

和田 確かに日本人は一般に国境というも
のに接触したことがないんで、海が国境にな
っているわけですね。そういう点で、日本に
とつてはかつてはプラスと言われていたこと

も、いまの国際環境の中では非常に脆弱な面
になっていきますから、中国大陸に対応し損つ
てというか、中国との間に事が起きることは
もちろん望ましくありませんけれども、ソ連
が日本に対する敵意を持つとか、非常に警戒
心を強めて、いろいろな面で圧迫を加えると
いう形になりますと、なかなか容易ならざる
ことになってきますね。

中嶋 そうですね。日本の安全保障にとつ
ては、中国よりもソ連の方がはるかに脅威が
あるわけですから、それだけにソ連との外交
関係というものも、私はたとえ北方領土な
ら北方領土のことだけを金科玉条、何でも北
方領土というのが正しいと思わないで、そ
ういう発想ではなくて、もつとある種のソフ
トウエアみたいなものを日ソ関係につくって
いく。同時に中国との間もそういう関係をつ
くっていく。つまり、日本外交がいかにある
意味での交渉力を持てるか。特に今後のアジ
アの中で朝鮮半島の安全ということを考えま
すと、日本はやはり朝鮮半島の安定のために、
中国にもソ連にも注文をつけ得るような外交
能力を今後持つていかなければならない。そ
ういう重大な使命を持っていますから、その
日本がどちらかにくみするようなことになる
と、対中・ソ外交でも日本の交渉力が全然な
くなってしまふという気がいたしますね。

和田 そうですね。この間、金日成が北京

を訪問しましたが、お互いにソ連と国境を接
しているという現実的な北朝鮮の地位とい
うこともありましようけれども、「覇権」問題と
いうのはうまくこなしてきたわけですね。

中嶋 だから金日成の訪中はいろいろ問題
がありまして、ある点での妥協なり取引があ
ったわけですが、ともかく「覇権」問題につ
いては、さすが金日成は社会党のような態度
はとらなかつたということだけははっきりし
ているのではないのでしょうか。(笑)

和田 そういふ点で、朝鮮半島の安定とい
うことに対して重要な役割りを果たさなけれ
ばならぬ日本の野党第一党の社会党があい
う体たらくであり、三木内閣の首班である三
木さん自身がどうも正確な事態を理解してい
ない。ここで万一、中国側の言うような意味
の「覇権」主義反対に乗って、日中平和友好
条約の問題を処理して、ソ連がもしそれで対
日攻勢を強めるといふことになりますと、私
はいま日本の前線というものは、シーパワー
の面から考えて単に日本海とか北方海域だけ
ではなくて、特に先ほども指摘されたスエズ
運河が開通してからペルシヤ湾口という問題
があると思うのですね。

ソ連艦隊がインド洋へ入ってきて、そんな
ことはないだろうと言えはそれまでですが、
もしペルシヤ湾の入り口で日本のタンカーが
ある種の脅威を受けるといふ形になりますと、

これは日本のエネルギーの台所に響くという意味で、特にソ連の海における影響力というものは、ペルシヤ湾というアラブの石油の積み出しの場所において日本の利益に直結しているという問題がありますね。特にシーパ



和田春生氏

ワウの研究をやっている人たちはそのことを大変問題にして、外交戦略も日本の安全保障も、単に極東にだけ目を向けておってはいけないのだということを言っているわけですね。最近ソ連にいらっしやいまして、このスエズ運河の開通をにらんでのインド洋に対するソ連の海軍作戦とか、そういうような面についての何か新しい動きはございませんか。

中嶋 インド洋については、ご承知のようにソ連はソ印条約以来非常に大きなアドバンテージを確保しました。それで印パ戦争によってバングラデッシュに恒常的とも言えるようなソ連の海洋権、それはソ連と中国がともに求めているのですが、それを確保しまして、それがいま南シナ海に及んでいるような

気がいたしますね。

特にソ連は、インド洋はもうこれで大丈夫である。伝えられたような中印間の関係の改善もなかなか思うようにいかない。ましてやあそこにはいろいろな問題がからんでいて、どうも自分、中印間はあのまま続くであろう。——とみている。これはソ連にとってはまさに有利なことです。やはりソ連の最近の海に対する認識がはるか東南アジアに及んでいるのではないかという気がするのです。

去年の一月に西沙群島で問題が起きたときに、ここに中ソ対立の影があるということに、日本では数少ない意見であったと思いますが私は申し込めたことがあるのです。当時私はサイゴンに行きまして、いろいろ現地で聞いたところによっても、まさにあの事件の背後にもいまおっしゃったようにソ連の海に対する野心といましましうか、戦略があった。西沙群島というかあの海域というのはハノイに近いですね。そういうこともあって、ソ連は中国を支持しなかつたばかりではなくて、事前にあそこですでにソ連は海洋調査団を送っていたということも聞きましたね。

これに対して第七艦隊はあの事件が起きる三日前に、あそこをマラッカ海峡に抜けてインド洋に逃れていった。事前に中国とアメリカとの間には了解があったのではないかというのが当時のサイゴンの見方でしたが、非常

うがった見方かもしれないが、ある意味ではそういう事実があったかもしれない。

私などはどうも最近のインドシナ半島の情勢の変化、ASEAN諸国の流動化ということとを考えると、今後南シナ海をめぐる問題

——地図を広げて南シナ海を見れば、西にマラッカ海峡があり、北に台湾海峡があり、その間にフィリピンがあり、ホルネオがあり、大きな内海になっていますね。しかも今後のアジアはそこが非常に不安定で流動化していきますから、この辺にいろいろ中ソの対立という戦略的な角逐が一つ出てくるのではないかとそれがやがて、台湾海峡を経て日本海からオホーツク海に至るソ連の大きな庭になってくるとはならないかという気がいたしますね。

和田 インド洋からそちらの方については、大体ソ連としては一応基本的な問題は済んだという表現は適当でないかと思いますが、条件ができ上がっている、ずっとマラッカ海峡から東の方にできている。仮にそういう戦略体制をとっているとしますと、いまの米ソ関係から見ますと、これはお互いに対立し競合もしていますけれども、中国が言うように両超大国が裏で手を握っているという各地で「覇権」を確立しようとしているという中国流の見方ですが、そういう点でアメリカとソ連の海軍力が南シナ海あたりで、ある意味で言えばドッキングして、それが中国に対する非常

な脅威になるというようなことも計算に入れているのでしょうか。

中嶋 ええ。私は中ソ関係をそういう海軍力なりあるいは軍事戦略の面から見れば、むしろこれは、ある意味で中国に同情すべき余地がかなりあるのではないのでしょうか。それほどまでに、現在のソ連のアジア政策というのは、ある意味ではアグレッシブであるということも言えるのではないかと思えますね。

和田 そういう中国大陸の東側に南北に長い日本列島が存在しているわけですから、日本の外交戦略ないしは姿勢というものについては、よほど総合的に判断していかないと、単に言葉の問題や目先の問題だけにとらわれて技術的に処理しようという形では、二進も三進もいかぬことになりますね。

中嶋 そうですね。それから私は朝鮮半島の問題もそうだと思うのですが、これは非常にむずかしい問題なんです、日本ではアジアの国際危機が連動するという一種のセンセーショナルな議論があるわけですが、今回の状況を見ますと、少なくともインドシナ半島と朝鮮半島はかなり性質が違うような気がします。

一つには、かつてあれほどの戦争の経験のあるといえますか、片方はとにかく釜山まで北側がきていけば血の海になった経験を持っていますし、そのことによって北側も決して

プラスではなかったという経験をお互いに持っている。そういう民族と、アジアの「三十年戦争」的な、持久戦的なゲリラ戦争であったあのベトナム戦争とは、問題の本質は違いますね。そこへ持ってきて、経済的、軍事的にも、かつてのチュー政権と朴政権はいろいろ違う。しかも朝鮮半島、北東アジアに関しては米中ソともいま現状維持を欲しているのではないかと思うのですよ。アメリカも実は台湾問題を含めて、ベトナムがああいう情勢にならなければ、あるいはフォード訪中によって一つのアメリカの新しい大きな政策転換があり、台湾、韓国からの軍事的撤退という方向が出たかもしれませぬ。

ところが、ベトナムがああいうことになったことによって、アメリカはこれ以上動けなくなりました。中国は、ただでさえいまソ連の影響力ないしソ連との関係が深刻になっていきますので、もしも朝鮮半島に激動が起こった場合に、北東アジアにソ連の軍事的な影響力が伸びてくることはまさに歴然としていますので、これは中国は警戒する。

ソ連としても、いま朝鮮半島で何か事を起こそうという感じは持っていませんね。そのことが実は金日成訪中に見られた中国と北朝鮮との食い違いだったと思えますね。そうすると、朝鮮半島の場合は、むしろ事態は必ずしも朴政権が最近非常に強調している危機と

いうことであるかどうかということ、われわれはもう一遍よく分析してみる必要があるのではないかと。日本で言われるように、ドミノ理論を逆に利用して朝鮮半島は危ないということとは、逆に朴政権の現在の立場をサポートすることにもなる。あるいはそれによって朴政権はますます強権化すると言いか、ヒステリックにならざるを得ないので、そのことの方が日本にとっても長期的には困ったことですね。

ですから、もっと開かれた判断の中で情勢分析をしてみますと、日本にとって朝鮮半島の安定が重要であり、そして日韓関係が重要であればあるほど、先ほどおっしゃったように、日本の外交的選択というものは、より思慮の深いものになっていかなければいけないというようなことを、私は最近つくづく感じて、先週日本に帰ってきたわけです。

和田 いい結論が出ました。どうもありがとうございました。

(六月十二日、文責は編集部)



第5卷第7号/昭和50年7月1日発行(毎月1回1日)
昭和46年10月26日 第3種郵便物認可 通巻第48号

新政

VOL.5 NO.7 1975

7

時 論 和田春生
対 談 中嶋嶺雄・和田春生
随 想 藤田至孝



新政治研究会